

アトモスフィア

研究の評価

柴田 武彦*

公的な研究機関、大学で行われている研究についての外部委員による定期的な評価、また、諸官庁の補助金等によって行われている研究についての研究開始前、中期、終了時に第三者が評価を行うことは、何時の頃からか、当たり前のことになっている。一定期間毎や、研究の区切りで研究評価が行われることは、評価を受ける研究現場側から見ると、自身で見直し、他者の目で検証してもらうことで、研究が独りよがりや自己満足に陥ることなく、あるべき方向へ軌道修正するまたとない機会を提供している。また、場合によっては、成果を宣伝するよい機会でもあろう。研究者社会や研究費を提供する側から見れば、配布された研究費が有効に使われているかどうかをチェックし、問題があれば修正する機会をもつことになる。筆者が研究者になった時期やそれ以前のように、制度としての研究室やグループの研究評価はないに等しく、研究費の配分、使い方が不透明であった時代に比べれば、たいへん結構なことといえる。では、評価があるべき状態で行なわれているかということ、おおくの研究者はどこかおかしいと感じているのではないか。「4年や5年毎の評価で成果が現れるような短期的視野の課題ばかりがもてはやされ、長期的視野が必要な基礎研究がないがしろにされるのではないか」、「流行に乗った仕事ばかりが高い評価を得るのではないか」、「そもそも、本当に客観的な評価などできるのか」といった心配や、「評価の準備にばかり時間と（金も）かかり、肝心な研究が圧迫されている」、「人の研究の評価にばかり時間がとられ、自分の研究ができない」というぼやきも聞こえてくる。評価などせずに、安定した身分、十分な研究費とインフラ、自身の見識で課題を設定できる自由度を与えれば、すばらしい研究ができるかということ、答えは明確に「No」である。実際にそのような環境を実現した研究機関があったが、そこへポストドクとして参加したときの経験が、それを確信させる。創造的な成果を生むためには、研究者（に限らないが）は必然的に自身の価値観に従って自分の夢に賭けることが基本であり、遊びも要る。それ故に独善になりがちであり、墮落し易い。それらを避けるには、外からの評価とそれへの備えはやはり欠かせない。一方、評価は、結果の言い放しでは、あまり意味が無い。何らかの形で被評価者と、これは忘れられがちであるが、評価者にも結果が反映されなければならない。また、ペナルティーは、研究を萎縮させるだけなので、例外にとどめ、被評価者に励みとなるような方式が必要である。さらに、評価者と被評価者の立場もできるだけ対等にできれば更に効果がある。そこでどうすればよいか。有効性に疑問がある形だけの評価はやめるべきである。例えば、立案が組織によって行われる大型プロジェクトを除いて、ペナルティー以外の見返りが見込めない事後評価はやめてはどうか。研究者にとってもっとも励みとなるのは人件費を含む研究費であろう。表彰も足しになるであろう。そこで、特に個人や小グループで行なう研究課題では、研究費提案について、その提案までに行われた研究成果の評価の比率を大きくし、「賞」として位置づけ、さらに、「賞金」である研究費については、使途や単年度で使いきるなどの制限は緩くするのはどうであろうか（実績の無い新人については当然別枠を用意する）。これで主要な評価を一本化できる。評価結果はすべて被評価者に戻し、反論を認めることで、評価者と被評価者との間に双方向の緊張関係を作ることも必要だ。更に、一定の評価技能をもつ研究評価者の層を厚くするために、中堅研究者に、夏期休暇期間程度の期間で、実際の評価現場での実地訓練の機会を与えるのはどうであろうか。他人の研究の評価を行うことを通して、自身の研究をも客観的にみる目が育つであろう。高い水準で互いに納得づくで評価しあえる環境の実現は、我が国の研究の健全な発展に欠かせない。

*独立行政法人理化学研究所中央研究所